

ISSN 2186 – 3989

「ありがとうございました」への解釈と対応  
－「子ども科学電話相談」音声資料の調査から－

大谷 鉄平

Pragmatic Interpretation and Correspondence to *Arigatougozaimashita*  
－ From a Survey of "Children's Science Telephone Consultation" －

Teppei Otani

北 陸 大 学 紀 要  
第51号(2021年9月)抜刷

「ありがとうございました」への解釈と対応  
— 「子ども科学電話相談」音声資料の調査から —

大谷 鉄平\*

Pragmatic Interpretation and Correspondence to *Arigatougozaimashita*  
— From a Survey of "Children's Science Telephone Consultation" —

Teppei Otani\*

*Received June 15, 2021*

*Accepted July 30, 2021*

### Abstract

In general, we use the greeting expression *Arigatou* "Thank you" to convey gratitude to the other person. On the other hand, *Arigatougozaimashita*, the polite and past form of "Thank you" implies "the end of the conversation" at the end of the discourse. This expression appears as an adjacent pair in conversation, such as A: "*Arigatougozaimashita*"-B: "*Arigatougozaimashita*". In this case, it is unnatural to interpret the preceding "Thank you" as gratitude and use *Doutashimashite* "Welcome" in the response. We get this implicit interpretation "the end of conversation" through the development of pragmatic proficiency.

In this study, the author hypothesized that in conversation between younger and elder people, the former is likely to interpret the latter's utterance *Arigatou* as gratitude but give an unnatural response. Then, the author investigated what kind of utterance the former makes and what kind of strategy the latter uses to establish a smooth conversation.

As the corpus, the author used scripted recordings of conversations on radio programs and described the actual situation from case studies. From the point of view of interpretation, it is considered that there is a standard conversational stage in the background due to the characteristics of the medium, and the younger people understand this as an implied premise. Also, there was a device in the utterance of the elders that made it possible to interpret it as gratitude.

Key Words : Gratitude, End of Conversation, Relevance Theory

## はじめに

一般に、挨拶表現の「ありがとう」を丁寧なかたちにした「ありがとうございます」は、「すみません」「感謝します」などと同様、感謝の意を受信者に伝達するための文言として用いられる。一方、これがタ形となった「ありがとうございました」は、同様に謝意をあらわすと同時に、用いられる場面、特に談話の結末部（と発信側が捉える場面）では、暗意としての「会話の終了<sup>1)</sup>」を示唆する。例えば、以下のような場面は、マス・メディアの報道にも頻繁に観察される<sup>2)</sup>。

作例 1 報道番組での一場面。ある話題に関する報道にコメンテーターが解説を行った後。

アナウンサー:ここまで、X 大学准教授の、(コメンテーター) 先生でした。

ありがとうございました (1)。

コメンテーター:ありがとうございました (2)。

(?? コメンテーター:どういたしまして (3)。)

アナウンサー:では、次のニュースです。

当該会話において、アナウンサーの「ありがとうございました (1)」との発話 utterance に対し推論を働かせれば、『「解説をしてくれたことに」感謝します』『「本番組に出演してくださったことに」感謝します』等々の解釈は可能であるものの、だからといって、ここでコメンテーターの発話が、(2) でなく、一般に挨拶表現の「感謝への応答」たる「どういたしまして」であれば、不自然な印象を拭えない (= (3))<sup>3)</sup>。つまり、このやりとりにおける「ありがとうございました (1) / (2)」には、ともに、「会話の終了」が含意され、互いにその解釈が共有されているがゆえ、スムーズな会話として成立しているのである。

周知のように、自然言語 natural language における「意味」には、「意味論 semantics 的意味」と「語用論 pragmatics 的意味」があり(今井他 (2012) p.2)、前者はいわば「字面どおりの意味」、「辞書の意味」、「字義」などと称される一方、後者は発信側/受信側による推論に基づく様々な語用論的過程を経た「解釈」の次元となる<sup>4)</sup>。また、言語習得の観点からも、他言語の理解面での獲得とともに、運用面に特化した語用論的知識の獲得の重要性が指摘されて久しい(遠山 (2006) など)。しかしながら、多くの日本語母語話者には自然な上掲作例のようなやりとりが、なぜ可能なのか、あるいは、どのようにして教授—獲得するのか、との論点に対する具体例を用いた考察の蓄積は、必ずしも十分ではないものと思われる(当該論点を正面から扱った日本語教材が少ないことも同様)。そこで、本研究では、質的調査として暗意のレベルで「会話の終了」を含む「ありがとうございました」との言語形式に注目し、使用場面を観察し「発信側—受信側」のやりとりを精緻に分析したうえで、発信側の方略や受信側の反応を整理することで、語用論的知識の獲得過程の一端を記述する。本研究の学術的寄与としては、語用論や言語習得分野への提言はもとより、新たな視座からの日本語教材開発への一助となることが期待される。

## 先行研究 (1) —感謝表現研究—

語用論との連関から、Searle (1975) を参照し「感謝」を「話し手にとって聞き手によってなされた過去の行為に利益があったことに基づいて為される発話内行為」と定義づけ

たうえで、一般に「ありがとうございます／ました」との挨拶表現は、社会言語学の範疇では感謝表現研究の枠組みでの成果に豊富な蓄積がある。ただし、その潮流面としては、（日本語教育への応用（市原（2016））も含め）談話上の機能やストラテジーの検討ならびに提案、位相差やポライトネスからの考察として提出され、特に『『ありがとうタイプ』／『すみませんタイプ』（岡本（1992））」と称されるように、同様に発信側の感謝を表し得る「すみません」との対比を発端とする議論が盛んに展開されている（住田（1990）、岡本（1992）、小川（1993）、坂本（1999）、尾鼻（2015）、飯尾（2017）など）。一方、本研究が注目する「ありがとうございました」との言語表現が有する、「ありがとうございます」には含意されない「会話の終了」とのメタ・メッセージに関しては、これらの先行研究では焦点化されていないものの、当該解釈の存在自体には、複数の言及が認められる。例えば熊取谷（1994）では、日本語の感謝ストラテジーを整理・分類している（下掲 表 1）が、Schegloff et al.（1973）の議論を踏まえ、前終結 pre-closing が感謝表現を形成することから、会話を終結に導く談話機能を認めている（同表、8）。

表 1 日本語の感謝ストラテジー（熊取谷（1994） pp.66-68 を筆者により抜粋）

分類枠	発話例
1 感謝する旨の説明	「感謝申し上げます」「お礼申し上げます」
2 感謝する意思・希望・必要性がある旨の表明	「ここに感謝の意を表します」「感謝の意を表したいと思いません」「おじさん、坊やお礼を言わなくっちゃいけませんね」
3 聞き手が発話者に行為 A を行った旨の言述	「本当にお世話になりました」「いつもお世話になりまして」「いろいろご教示いただきまして」
4 聞き手が発話者に益をもたらした旨の言述	「大変助かりました」「おかげさまで」
5 嬉しく思う、ありがたく思う、の言述	「本当にうれしく思っております」
6 聞き手あるいはその行為に対する賛辞（肯定的評価を与える）	「これはご丁寧に」「これはご親切に」
7 視点の移動による丁寧行動	「すみません」
8 会話の前終結（pre-closing）を形成	A：ありがとうございました。 B：はい。遅いから気をつけて帰ってね。

同様に、「前終結」との点では、前掲の坂本（1999）にも言及が認められる。

「ありがとう」は相手の動作を終結したものと捉えた時に出るため、相手の自分に対して向けられた動作が行われる前には出にくく、その動作の終わった後で出ることが多い。終結した動作に使われるということから、談話の終わりを示すこともある。インタビューなどの終わりに使われる「ありがとう」はこれで終了することを示す。同様にスピーチなどは「ありがとう」が終了の合図として使われる。インタビュー最後の「ありがとう」に対する「どういたしまして」などが不自然なのは、それが本当に感謝を表しているだけではないからである。（坂本（1999） p.25 傍線は筆者による）

当該記述は談話機能上の「すみません」との対比を前提としており、「ありがとうございます」と「ありがとうございました」との差異への注目は認められず、また、「ありがとう」自体を包括的に「終結した動作に使われる」と捉える点には疑問が拭えないものの、熊取谷（1994）の表 1 の「8」と同様、具体例が隣接ペア adjacency pair の形で提示されて

いる点は、メタ・メッセージ（であるとの認識は、上掲引用傍線部の記述からも明らかである）としての「会話の終了」の解釈と、単一の発話でも得られる「感謝」の解釈との差異性を示唆しよう。

また、坂本（1999）に先立ち、角田（1994）は「ありがとうございます／ました」の差異を、「時制の切り替えが談話の中で持つ語用論的な役割（p.10）」の観点から考察している。同論では「ありがとうございました」に「過去の事柄へのお礼」ではない場合を認め、時制の切り替えが「談話や場面を開始するか継続するか、あるいは終了するかなどについての、話手の意志の違いを表す（p.10 傍線は筆者による）」ことを、「ありがとうございます／ました」をはじめ「わかります／ました」「美味しい／しかった」「お世話になります／ました」の事例をもとに考察している。そして、いずれの場合も、過去形への切り替えが「会話の区切り、場面の区切りを示す印、あるいは合図（p.11）」であると指摘し、日本語教育において当該の切り替えを語用論的な効果も含めて指導することの重要性を訴える。

そして、発話の際、仮に「会話の終了（または角田（1994）でいう『区切り』）」が、直前に引用した角田（1994）の「話手の意志（本研究では『発信側の企図』と称する）」であったとしても、それが受信側に正確に諒解されたか、換言すれば受信側に同様の解釈が得られているかを判断するには、隣接ペアを構成する応答文のあり方を確認しなければならない（前掲の坂本（1999）p.25 傍線部参照）。この点に関し、「ありがとう」への応答を分類・類型する試みは、管見の限り西（2006）のみであり、また、同論の焦点はあくまで『感謝表現としての』ありがとう（ございます）への応答文であるため、本研究で「自然なやり取り」と見なす「A:ありがとうございます—B:（Aへの応答として）ありがとうございました」との直接的な連関性は認められない。しかしながら、応答文としての「ありがとうございました」以外の可能性ないし表現の多様性を押さえておくためには、西（2006）が行った意識調査の結果は有効であろう。以下の表2は、同氏が鹿児島県立短期大学で行ったアンケート調査（対象者21名）の回答結果を、筆者が整理したものである。なお、表2の後には、同調査での質問文を引用する（いずれも同p.3より）。

表2 西（2006）でのアンケート調査における対象別の結果上位2位（p.3）

対象	1位		2位	
		名		名
親しい友人	「いいよ」系	14名	「はい」系	5名
クラスメート	「いいよ」系	13名	「いえいえ」系	6名
親しい近所のおばさん	「いえいえ」系	12名	「いえいえ、どういたしまして」	3名
見知らぬおばさん	「いえいえ」系	12名	「どういたしまして」	3名
その他 親	「はい」系	5名	「いいよ」系	4名
その他 小さな子ども	「どういたしまして」	3名		
※1「いいよ」系：「いいよ」「いいよいいよ」「いいってことよ」「いいですよ」等 ※2「はい」系：「はい」「うん」「はいはい」「はいー」等 ※3「いえいえ」系：「いえいえ」「いいえ」「ううん」「いやいや」等 ※4「その他」は自由記述であり、全員が回答したわけではない。 ※5西（2006）では別の対象者に同じ調査を行い、「無言」との回答も見られた。				

【質問】英語では“Thank you!”の返事として“You’re welcome.”などと言います。日本語では「ありがとう（ございます）」の返事として、「どういたしまして」が対応するように見えますが、実際にあなたはどのように言うか対象別に記入して下さい。（複数回答可）

西（2006）での分類枠を参照すると、「会話の終了」を含意する発信側の発話に対する応答文のうち、同様のメタ・メッセージを包含する「ありがとうございました」以外の多様性として、大きく、「いいよ」などの「感謝には及ばない」すなわち（Ⅰ）「**感謝** 不要」、  
「はい」「うん」などの（Ⅱ）「**感謝**の肯定」、  
「いえいえ」「いいえ」などの（Ⅲ）「**感謝**への否定」、  
（Ⅳ）「**どういたしまして**」、  
（Ⅴ）「**無言**」を措定できる。本稿ではこれに（Ⅵ）「**ありがとうございました**」を加えた計6つの応答文の分類枠を設けたうえで、分析を試みたい。

## 先行研究（2）—関連性理論—

筆者は冒頭の作例における「アナウンサー:ここまで～ありがとうございました（1）／  
コメンテーター:ありがとうございました（2）」とのやりとりを「自然」「スムーズな会話」と称したが、これは両者が「ありがとうございました」との言語表現に「感謝」の意味とともに（あるいはそれに前景して）「会話の終了」との解釈を得、また相手も同じ解釈を得ることを企図して発話するものとする。同様に、「アナウンサー:ここまで～ありがとうございました（1）／  
コメンテーター:どういたしまして（3）」が「不自然」であるのは、「感謝」の意味自体ではなく、「会話の終了」との解釈の共有における不成立に起因するものとする。前掲の「ありがとうございました」における「会話の終了」に言及した諸先行研究においても、「機能」「合図」など、「感謝」と同様の「意味」レベルで論じるものは皆無であった。以上より、本研究では「会話の終了」を「発信側／受信側による推論に基づく様々な語用論的過程を経た『解釈』の次元」と捉え、解釈と対応に関する記述を関連性理論 Relevance Theory の観点から試みることにする。

関連性理論は発話 utterance における言語形式とコンテクスト<sup>6</sup>との相互作用により生じる解釈を研究する語用論に属し、Sperber and Wilson（1995）<sup>7</sup>を創始とする。ある発話が受け手にとって「①確信が持てなかった想定 assumption を確信へ変えたとき、②想定の間違いが明らかとなり修正や破棄をするとき、③コンテクスト的含意 contextual implication をもつとき、『関連性がある／をもつ (relevant)』とする（今井（2015）p.50 抜粋）」といい、人間の認知<sup>8</sup>は関連性を最大にするように働く性質をもつ（＝関連性原理Ⅰ、今井（2015）p.57 抜粋）。また、すべての意図明示的伝達行為は、それ自身が最適な関連性をもつことを当然視している旨を伝達している（＝関連性原理Ⅱ、同上）とした。両原理の措定は、とりもなおさず、ある発話の受信者が「その発話には関連性があると考え、自動的に（＝非意識的に）解釈を始める。その解釈方法も自動的であり、且つきわめて迅速である（今井（2015）p.55 傍点は今井）」こと、すなわち受信側はある発話の意味論的意味を無意識かつ迅速に推論を用い語用論的意味として解釈していること、ないし発信側の発話もまた、これを当然視したものであること、という言語実態を反映するものである。つまり、「ありがとう（ございます／ました）」の意味論的意味すなわち字義は「感謝を表す挨拶表現」で良いだろうが、受信側がいわゆる「字義／字面通りの意味で捉えた」という場合の「意味（＝『感謝を表す挨拶表現』）」は、意味論的意味ではなく、語用論的

意味であると説明できる。

一方、関連性理論では「発話の言語形式が持つ意味は、発話が表現している意味（＝発話によって表出される命題）を下回る（今井（2015）p.22）」というテーゼを、「意味確定度不十分性のテーゼ semantic underdeterminacy thesis」として打ち出している。そこで、受信側は発話の意味論的意味に推論による肉付けを行い、明意 explicature と暗意 implicature を得る、とする。大雑把に言えば、前者は発信側が「明示的に伝えようとしていること」、後者は「非明示的に伝えようとしていること」である（今井他（2012）p.63）<sup>9</sup>が、「会話の終了」は言語形式からの発展により得られる解釈ではないため、暗意に属しよう。ここで、今井（2015）を参考に、冒頭の作例のやりとりにおけるコメンテーターの「会話の終了」との暗意の獲得過程を記述しよう。

#### 作例 2（作例 1 再掲）

アナウンサー：ここまで、X 大学准教授の、（コメンテーター）先生でした。  
ありがとうございますました。  
コメンテーター：ありがとうございます。  
アナウンサー：では、次のニュースです。

上掲例におけるアナウンサーの第一発話は、ある話題に関するニュースに対するコメンテーターの解説が終了した後の発話であり、当該話題もまたここで終了する。一方、第二発話では、コメンテーターは、第一発話のアナウンサーの「ありがとうございます」における「感謝」との明意を諒解するとともに、「言語形式からの発展」からは得られない「会話の終了」との暗意もまた、言語形式とコンテキストからの推論をはたらかせ、（アナウンサーが同様の解釈を行うことを当然視し、）結果的に対応する「ありがとうございます」との発話を行い、スムーズな会話として成立している。ここには、コメンテーターにおける以下のような推論がはたらいているものと思われる。

(i) アナウンサーが「ここまで」「～でした」「～ました」を伴う発話をした。

(ii) 私（コメンテーター）の当該話題に対する解説は終了している。

∴ 「会話の終了」である。

今井（2015）に従えば、(ii) は「暗意された前提」と説明できる。ここに、言語形式に対するアドホックな概念構築をはじめとした発展の結果、冒頭の明意（『解説をしてくれたことに』感謝します』『本番組に出演して下さったことに』感謝します）などを合わせた解釈が得られ、また、上掲の関連性原理 I・II に基づき、コメンテーターが妥当な回答を発話したといえる。

以上を踏まえ、本研究では字義（＝発話の論理形式／意味論的意味）、明意、暗意を次のように記すことで、「ありがとうございます」の語用論的解釈と対応に関する議論を進めてゆきたい。

- a. 発話の論理形式：感謝を表す表現形式（＝ありがとう）＋丁寧（＝ごさい）＋過去・完了（＝ました）
- b. 明意：（自身の何らかの行為に対する）感謝の意思表示
- c. 暗意： 会話の終了

つまり、概略的には、受信側において a. の意味論的意味を「字面通りに」解釈した場合



## 【仮説】

相談者である子どもは、語用言語能力の発達段階にある。ゆえに、談話の結末部において、発信側（年長者にあたる司会者・解説者）の「ありがとうございました」との発話に対し「感謝の意思表示（明意）」と「会話の終了（暗意）」との解釈を正確に得ることができず、結果的に上掲（Ⅰ）～（Ⅴ）のような応答をし、「スムーズな会話」が成立しない可能性がある。一方、このような場面は、全国配信される生放送番組としては適切ではない（ラジオ（音声のみ）との媒体的要因も加味する）。そのため、発信側は妥当な「ありがとうございました（＝Ⅵ）」の呼び水となる、あるいは（Ⅰ）～（Ⅴ）の応答に見合う文言を伴う発話を行う。

本研究ではこの仮説をもとに、前掲の手順で得たスクリプトのうち、特に各相談者（＝子ども）と司会者・解説者（＝年長者）との談話の結末部に注目し、やりとりに用いられる文言を注意深く観察した。また、当該のやりとりに関し、2018年12月24日放送分すべてのものを集積し、両者の発話に用いられる文言や内容に対する量的調査を施した。そのうえで、同仮説と照らし合わせ、関連性理論の観点から子ども・年長者の発話内容を分析し、検証を踏まえた考察の提出を試みる。

なお、言語資料の出演者に関し略述する。同日の場合、司会はNHKアナウンサー（女性）、解説者は専門家3名（昆虫・動物・科学。いずれも男性）であり、約3時間の番組内で計26名の子どもの相談に答える、との内容であった。相談者（＝子ども）に関する情報は以下の通りである。

表3 言語資料における相談者（＝子ども）の学年ならびに性別

順番	学年	性別	順番	学年	性別									
1	S1	M	7	S2	M	13	S2	M	19	S1	M	25	S5	M
2	S4	M	8	S3	F	14	S1	F	20	A6	M	26	S1	M
3	S2	F	9	S3	M	15	S3	F	21	S4	F	A=未就学児 S=小学生 M=男子 F=女子		
4	A6	F	10	S3	M	16	A5	M	22	S3	M			
5	S2	F	11	S2	F	17	S4	M	23	S4	M			
6	A3	F	12	S4	M	18	S3	F	24	S3	M			

以下、次節では、代表的なやりとりを挙げるとともに、調査結果に基づく【仮説】の検証結果を報告する。そのうえで、関連性理論の観点から当該結果の分析・考察を行う。

## 調査結果—量的調査の結果と仮説との対応—

ELANを用いて作成したスクリプトの観察の結果、26の相談の全てにおいて、「会話の終了」を含意する「ありがとうございました」が出現する隣接ペアは「司会者による『ありがとう』を含む発話→相談者による応答の発話」の順であった。そのうえで、後者の発話を前掲（Ⅰ）～（Ⅵ）の枠組みで分類し、集計した結果が表4である。

表 4 司会者の発話に続く相談者の発話の分類・集計結果

I	II	III	IV	V	VI	※No.21
0	4	0	0	0	23	II, VI重複

同表にて確認されるように、今回収集した資料においては、司会者の「ありがとう」を含む発話を受け、大多数の相談者が同じく「ありがとう」を含む発話で応答していた。この結果は、直前に掲げた【仮説】の前半部を大きく否定するものとなった。一方、末尾の「発信側は妥当な『ありがとうございました(= (VI))』の呼び水となる、あるいは(I)～(V)の応答に見合う文言を伴う発話を行う。」の部分は、個々のやりとりに多数観察された(①)。また、一部言及した「(発話に対する) 媒体的要因」の可能性が窺える点も認められた(②)。ゆえに、次にこれら①、②に関し、逐次、具体例を提示しつつ概説し、後の関連性理論の観点からの議論における論点整理を行う。なお、(II)に分類した相談者の発話としては、「はい(表3 No.5, No.9)」「はい(同 No.21)」「わかり(ました) 12(同 No.12)」が確認された。

## 相談者からの「ありがとう」のための、司会者からの発話方略

表4の結果が導出された要因を探るうえでは、個々の相談の結末部において、相談者の発話に先行し司会者が「ありがとう」との文言に加え、「何に対して『ありがとう(=感謝)』なのか」について言明している点が注目される。すなわち、当該言明があることで、相談者もまた、「相談に答えてくれて『ありがとう(=感謝)』と発話することが容易となり、結果的に「会話の終了」との暗意への想起の有無に関わらず、「ありがとうございました—ありがとうございました」との自然な隣接ペアが構築されるのではないかと推察される。以下、具体例を見てみよう。

### 例1 No.2<sup>13</sup>

- 21 司会 は::い(.)わかりましたか::↑  
 22 子ども はい  
 23 司会 はい  
 24 司会 きょうはしつもんしてくれてどうもありがとう::  
 25 子ども ありがとうございました  
 26 司会 はい  
 27 司会 さよなら::  
 28 子ども さよなら::  
 29 解説者 さよなら::

### 例2 No.23

- 29 司会者 (名前) くだいじょうぶかな::  
 30 子ども はい  
 31 司会者 はい  
 32 司会者 きょうはどうもげんきにしつもんしてくれてありがとう::  
 33 子ども ありがとうございました

- 34 司会者 はい  
 35 司会者 さよなら::  
 36 子ども さよなら  
 37 解説者 さよなら

例 3 No.1

- 06 司会 だいじょうぶですか::↑  
 07 子ども はい  
 08 司会 わかりました::↑  
 09 子ども はい  
 10 司会 は::い  
 11 司会 きょうはどうもありがと::  
 12 子ども ありがとうございました[た]  
 13 司会 [は)::い  
 14 司会 さよなら::  
 15 解説者 さよなら  
 16 子ども さよなら

例 1、例 2 など、今回収集した言語資料の範囲（全 26 件）では、結末部での司会者の発話において、「ありがとう」に「質問をしたことに対して」との内容が付加される事例が 16 件、それ以外の 10 件が例 3 をはじめとした「ありがとう」のみ、であった。前者の件数が後者を上回る結果となった背景には、年長者側である司会者による、相談者（＝年少者側）の「ありがとう」への理解補助との方略が推察される。一方、当該発話に対する相談者の応答に、「質問に答えてもらったことに対して」との内容を示す文言が付加される例（例えば、「答えてくれてありがとうございました」など）は観察されなかった。換言すれば、表 4 (VI) に分類されるすべての事例は、判を押したように、上掲 3 例同様「ありがとうございました」となっており、定型的な発話との印象が拭えない。この背景に関する検討を、次節にて行いたい。

### （発話に対する）媒体的要因の可能性が窺える点

一方、今回収集した 26 の相談の全てにおいて、結末部での「司会者—解説者—子ども」間でのやり取りには、定型的な側面が窺われる結果となった。すなわち、会話の展開として、「解説者による解説の終了→司会者からの理解の確認→相談者からの理解の表明→司会者からの『ありがとう』を伴う発話→相談者からの応答→相談の終結」のような流れが認められ、かつ、当該展開は相談者の学年・性別に関わらず一貫していた。なお、ここでの「司会者からの理解の確認」とは、上掲例 1「21」の「わかりましたか」、ならびに例 2「29」・例 3「06」の「だいじょうぶ」を伴う発話をさす。また、「相談（＝会話）の終結」は、決まって「司会者—解説者—子ども」間で「さよなら」との挨拶表現を交わすかたちで展開されている実態が確認された（例 1「27～29」、例 2「35～37」、例 3「14～16」）。

当然ながら、当該の定型的な展開の背景には、ラジオ番組との性質上、台本のようなものが存在し、「司会者—解説者」間で情報が共有されていることが容易に推察できる。一方、ここで注目したいのは、相談（＝会話）の結末部でのこの展開が相談者側にも共有されていることが窺える点である。これについて、表 4 (II) とした「(感謝の) 肯定」の 2 つの

事例から検討する。

例 4 No.9

40 司会者 (名前) くんだいじょうぶですか::↑  
41 子ども はい  
42 司会者 は::い  
43 司会者 きょうはしつもんどうもありがと::  
44 子ども はい  
45 司会者 は:い  
46 司会者 さよなら[:]  
47 子ども [あ]りがとうございま  
48 子ども あ  
49 子ども さよなら::  
50 解説者 さよなら::

例 5 No.20

102 司会者 だいじょうぶかな↑  
103 子ども うん  
104 司会者 はい  
105 司会者 きよ[うはどうもあ]  
106 子ども [ありがとう]ございました  
107 司会者 は::[いあり]がと::  
108 解説者 [はいど::も]  
109 解説者 さよなら  
110 司会者 さよ[なら::]  
111 子ども [さよなら]

まず、例 4 では、「43」で司会者の「ありがとう」を伴う発話に対し、相談者は「はい」と応答(=「44」)し、これに対し司会者は「さよなら」と発話することで相談の終結へと展開させている。一方、相談者はこれに一旦「ありがとう」を伴う発話をしかけるが、「さよなら」と言い直しを行っている(=「47~49」)。ここでの言い直しは、相談者が「さよなら」への応答として「ありがとう」が不適切と気付いたことによるが、ここで「ありがとうございました」と言いかけた理由としては、相談者に「ありがとう→さよなら」の展開、具体的には結末部における「司会者からの理解の確認→相談者からの理解の表明→司会者からの『ありがとう』を伴う発話→相談者からの応答→相談の終結」との定型的な展開への理解があった、との説明が可能ではないかと考える。

一方、例 5 では、相談者の「ありがとう」を伴う発話が遅れる例 4 と対照的に、司会者の「ありがとう」(=「105」)に先立って相談者が「ありがとうございました」と発話し(=「106」)、司会者がそれに「ありがとう」で応答している(=「107」)。当該のやりとりについては、「106」は「104」を受けての発話、と捉えることが妥当と思われるが、さらに踏み込めば、相談者に結末部での定型的な展開への理解がある一方、「司会者からの『ありがとう』を伴う発話」のみが抜けてしまった、と説明することができるのではないだろうか。

今回の調査結果からは、以上など(Ⅱ)の数例も含め、26 の事例すべてにおいて、相談者にも「解説者による解説の終了→司会者からの理解の確認→相談者からの理解の表明→司会者からの『ありがとう』を伴う発話→相談者からの応答→相談の終結」との展開があ

る程度（あるいは完全に）理解されている様子が窺えた。前述に仮定した台本の存在が真実であれば、それを持たない相談者である子どもたちにとって、なぜ当該の展開を共有し得たのであろうか。その理由としては、個々の相談がマス媒体により配信されており、自分の相談を待つ子どもが、他の相談者からの相談や会話のやり取りを聴取できる点が要因として大きいだろう。無論、今回収集した言語資料は「冬休み子ども科学電話相談」の「第1回」であることから、相談者 No.1 の場合はどうなのか、との指摘もあろうが、同番組は子どもたちの長期休暇中を中心に、定期的に放送されるシリーズ番組であり、本人が過去の番組を聴取していた可能性も大きい。一方、更なる言語資料の蓄積を経て、各シリーズ第1回放送のはじめの相談でのやり取りを横断的に比較分析することにより、何らかの差異が見いだせるかもしれない。この点については、今後の検討課題とする。

以上より、司会者からの「ありがとう」と隣接ペアを成す相談者の発話が「ありがとうございました」に一貫した背景の一端として、マス媒体からの配信の聴取経験の蓄積に伴う「会話の展開」への理解、ないし多用される『「ありがとうございました」の適切性』への理解を指摘したい。

## 「ありがとうございました」の語用論的解釈

最後に、前掲した「字義」「明意」「暗意」をもとに、年長者の「ありがとう」に対する子どもの解釈可能性の記述を試みたい。

先述のように、今回の調査からは、【仮説】に反し、ほぼすべてのやり取りにおいて「ありがとう—ありがとう」の隣接ペアが観察される、との結果を得た。その一方、相談者の「感謝」との解釈を得るため、先行する司会者の発話において「しつもんしてくれて」などの文言を付加することにより、「何に対して『ありがとう（＝感謝）』なのか」について明示する、との方略が確認できた。これにより、相談者は「明意：感謝の意思表示」との解釈を得ることが容易となり、結果的に、自身も同様に「明意：感謝の意思表示（＝『答えてくれて／教えてくれて／…』ありがとう）」での発話を行っている可能性が推察される。

一方、相談者が「暗意：会話の終了」の解釈を得、これに基づき「ありがとうございました」との発話を行っている、ということ論証するだけの明示的な根拠は得られなかったものの、その可能性を示唆する点を認めることはできよう。すなわち、26例全ての談話の結末部において、「司会者からの理解の確認→相談者からの理解の表明→司会者からの『ありがとう』を伴う発話→相談者からの応答→相談の終結」との定型的な展開が確認できた。また、ラジオというマス媒体の特性上、個々の相談者は他の相談者と司会者・解説者のやり取りを聞くことが可能である。したがって、前掲（i）（ii）と同様、「暗意された前提」から相談者が推論をはたらかせることで、『「ありがとうございました』というべき場面である」との解釈を得ている、との解釈可能性を指摘することはできよう。

(iii) 司会者が「ありがとう」と発話した。

(iv) 「①司会者からの理解の確認→②相談者からの理解の表明→③司会者からの『ありがとう』を伴う発話→④相談者からの応答→⑤相談の終結」という展開があり、今、③が終了した。

∴ ここは「ありがとうございました」と言う場面である（≡「会話の終了」である）。

なお、ここで「会話の終了」を（）付きとしているのは、相談者が単に、他の相談のやり取りを参考に同様の発話を行っている、との可能性が排除できないことによる。ただし、

先に引用した今井（2015）の「その発話には関連性があると考え、自動的に（＝非意識的に）解釈を始める。その解釈方法も自動的にあり、且つきわめて迅速である（p.55、再掲）」に従えば、先行する司会者の発話に対し何の解釈もせずにオウム返しのように発話を行っているとは考えにくく、また、例4（No.9）や例5（No.20）からも確認できるように、あくまで定型的展開に基づく（iv）の暗意された前提は、すべての相談者に共通した想定として存在するものと考えられる。したがって、本研究では大きく「ここは『ありがとうございました』と言う場面である」を暗意とし、「会話の終了」をその一部として捉えたい。

## おわりに

本研究では、挨拶表現の「ありがとう（ございます／ました）」が感謝の意を受信者に伝達するために用いられる一方、談話の結末部でのやりとりにおいて出現する際、「会話の終了」を含意し「ありがとうーありがとう」の隣接ペアが形成されることに注目し、語用論的観点から、「年少者一年長者」間でのやりとりに関する実態調査を通じ、年少者側における解釈可能性ならびに年長者側による発話の方略について考察を行った。今回収集した音声資料に対する調査結果は、上掲した【仮説】に反するところが大きかったが、年長者側の発話（＝「ありがとう」）への年少者側の返答に「ありがとう」が極端に大きかった理由として、「そもそもラジオ番組である」との媒体的要因、ならびに年長者側からの補足（＝「質問してくれて」）により「感謝」としての使用が可能となること（＝「(答えてくれて、など) ありがとうございました」）、が示唆された点は、改めて指摘しておきたい。

今後の課題としては、当然のことながら、より多くのデータを収集・スクリプト化することで事例数を豊富にすることが考えられる。ただし、定型的な会話の展開ならびに表4の結果を勘案すると、今後事例数を増やしても、司会者の発話に続く相談者の発話の多様性は認められないことが推察される。その意味では、「日本語日常会話コーパス（CEJC）」、「名大会話コーパス」、「日本語自然会話コーパス（BTSJ）」など、自然会話を収録したコーパスから妥当な場面を抽出し検討する、という手法も考えられよう。

同様に、表4の結果に関しては、今回は西（2006）に基づき相談者の発話形式の分類を行ったが、「ありがとうございました」以外では、数例の（Ⅱ）「(感謝の) 肯定」のみが認められ、（Ⅰ）「(感謝) 不要」、（Ⅲ）「(感謝への) 否定」、（Ⅳ）「どういたしまして」、（Ⅴ）「無言」は皆無であった。（Ⅳ）が皆無であった点は前掲の坂本（1999）p.25の主張の妥当性を補強する可能性も考えられるものの、（Ⅰ）（Ⅲ）（Ⅴ）の皆無が何を示唆するかは、現時点では不明である<sup>14</sup>。この点については、後の稿にて、改めて考察したい。

## 注

<sup>1</sup>以下に引用する先行研究では、同一内容を指す異なる用語が複数観察されるが、便宜的に本研究では「会話の終了」で統一する。

<sup>2</sup>日常的に観察されるやりとりであるため、下掲では特定の実例ではなく、敢えて作例を用いた。

<sup>3</sup>匿名査読者より、談話結末部以外での「ありがとうーどういたしまして」の隣接ペアの自然さに関する指摘があった。これについては、アナウンサーからの「感謝の意思表示（明意）」相応する返答がなされることは自然であろうと考える。ただし、その際に用いる文言としては、下掲の表2の西（2006）に認められるとおりの、「どういたしまして」に比し、「いえいえ系」が選択されよう（「アナウンサー」と「コメンテーター」との親疎関係は、同表「見知らぬおばさん」に近いと思われる）。一方、以下に詳述するように、本研究では

「会話の終了」を「発信側／受信側による推論に基づく様々な語用論的過程を経た『解釈』の次元」と捉える。つまり、当該作例では、暗意した前提に「会話の終了」があるために表出した隣接ペアであり、談話結末部「以外」とは連関性を有しない。

<sup>4</sup>意味論的意味と語用論的意味との差異は、今井（2015）pp.2-5 に詳しく説明されているため、参照されたい。

<sup>5</sup>なお、西（2006）での調査において「無言」は他の非言語行為との組み合わせによって分析されているが、マルチモーダル multimodal な言語行為として「言語行為＋非言語行為（例えば、笑顔＋『いえいえ』など）」との比較対照に検討の余地が認められる。また、「ありがとう（ございます／ました）」との文言を聞き取ったとしても、「感謝される理由が分からない」「感謝されて当然」「どのような意図で『ありがとう』と言っているのか考えたい」等々、受信側の認知環境 cognitive environment（後に詳述する）次第で、いかようにも「無言」の背景を推察することが可能である。ゆえに、本稿では西（2006）の分類枠としての「無言」のみを援用する。

<sup>6</sup>関連性理論では「コンテキスト」を「聞き手の頭のなかにあり、発話の解釈にあたって推論の前提となる想定（今井他（2012）p.57）」と定義づける。「文脈」と同義ではない点に注意されたい。

<sup>7</sup>Sperber, Dan. et al. “Relevance” (2) Blackwell, 1995. なお、同書の記述に関する多くは、内田他訳のスペルベル, D 他（1999）を参照した。

<sup>8</sup>「ある人が頭に浮かべることのできる想定（認知的総和）をその人の認知環境（cognitive environment）と呼ぶならば、人間は自分の認知環境が改善されることをいつも望んでいる存在なのだ。認知環境を改善する作用を認知効果（cognitive effect）と呼ぶなら、「関連性がある」ということは、「認知効果をもつ」ということと完全に同義になる。（今井他（2012）p.58）」

<sup>9</sup>より具体的には、明意は、発話の言語形式を発展 develop させて得る表出命題のことである。発展は言語形式の曖昧性を除去するための語用論的過程であり、今井（2015）では①一義化 disambiguation、②飽和 saturation、③アドホック概念構築 ad hoc concept construction、④自由補強 free enrichment を挙げている。一方、暗意は語用論の発展とは連関性が無い。

<sup>10</sup>当該データの利用は本研究のみを目的とし、著作権法（<http://www.tv-copyright.jp/>）に抵触しないことを確認している。また、NHK「聴き逃しサービス」の利用も「著作権法で許された範囲内」に該当するものである。

（[https://www.nhk.or.jp/toppage/nhk\\_info/copyright.html](https://www.nhk.or.jp/toppage/nhk_info/copyright.html)）

<sup>11</sup>当該分類に関しては高塚（2001）と関山（2004）を援用した。詳細は同論を参照されたい。

<sup>12</sup>言語資料中のやりとりとしては、直前の司会者の「今日はいいい質問どうもありがとうー」に対し、一旦「わかり」と言いかけ、直後に「さよなら」と言い直している。文脈上、ここでは相談者が「分かりました（＝肯定）」と言いかけたものと判断し、「ました」を（）にて補足した。

<sup>13</sup>ELAN を用いて作成したスクリプト（text 形式）で、発話番号は便宜的にそのまま用いる。一方、転記記号は一般的な会話分析に用いるものに倣い、「:」は前の音の引き延ばし、「(.)」はわずかな間、「↑」は上昇調、「[]」は発話の重なりをさす。なお、傍線は筆者による強調。

<sup>14</sup>例えば「いえいえ」「いいえ」などの「否定」は、若干子どもが用いる表現としては違和感があるように思われるが、緊張していたり、定型的な展開（特に「ありがとうーありがとう」の段階）をすっかり忘れてしまっている子どもの場合、「沈黙」が見られることは、十分に推察可能であろう。

## 参考文献

- 飯尾牧子「感謝を表す表現：「ありがとう」と「すみません」—大学生におけるコミュニケーション様式の一考察—『東洋学園大学紀要』,26(1), 55-68(2017).
- 市原明日香「感謝表現研究の概観—日本語教育への応用に向けて—」『人間文化創成科学論叢』,18, 1-9(2016).
- 今井邦彦他『ことばの意味とはなんだろう』岩波書店,2012.
- 今井邦彦『言語理論としての語用論』開拓社,2015.
- 岡本真一郎「感謝表現の使い分けに関与する要因(2)—「ありがとうタイプ」と「すみませんタイプ」はどのように使い分けられるか—」『愛知学院大学文学部紀要』,22, 35-44(1994).
- 小川治子「「すみません」の社会言語学的考察」『言語文化と日本語教育』,6, 36-46(1993).
- 尾鼻靖子「感謝表現としての「ありがとう」と「すみません」の境界線：シンボリック相互作用理論を適用して」『言語と文化』,18, 15-28(2015).
- 熊取谷哲夫「発話行為としての感謝—適切性条件、表現ストラテジー、談話機能」『日本語学』,13(08), 63-72(1994).
- 坂本恵「「ありがとう」と「すみません」」『麒麟』,8, 24-27(1999).
- スペルベル, D 他『関連性理論—伝達と認知(第2版)』研究社,1999.
- 住田幾子「感謝のあいさつことば—「ありがとう」と「すみません」について—」『日本文学研究』,26, 1-11(1990).
- 関山健治「第二言語習得語用論の潮流とこれからの英語教育」『語用論研究』,6, 47-56(2004).
- 高塚成信「語用論的問題を回避・解決するためのコミュニケーション方略—語用論的方略の分類法の提案—」『中国地区英語教育学会研究紀要』,31, 41-50(2001).
- 角田三枝「「ありがとうございます」と「ありがとうございました」の語用論的違い」『日本語教育方法研究会誌』,1(3), 10-11(1994).
- 遠山千佳「第二言語における談話の習得：認知語用論的アプローチからの一考察」『言語文化と日本語教育』,増刊特集号, 32-52(2006).
- 西香織「「ありがとう」と言われたら—鹿児島市における意識調査及び街頭調査を通して—」『鹿児島県立短期大学紀要人文・社会学編』,37, 1-15(2006).
- Schegloff, E. et al. Opening up Closings. "Semiotica" (8), 289-327(1973).